

<書評>

外科手術の発展により、必要性の高まる精緻な解剖構造を確認できる書

「グラント解剖学図譜 第 8 版」

Anne M. R. Agur, Arthur F. Dalley ●原著

坂井 建雄●監訳

小林 靖, 小林 直人, 市村 浩一郎, 西井 清雅●訳

評者 森 正樹(東海大副学長(医系担当))

本書の原著はスコットランド生まれでカナダのトロント大などで活躍した Grant 教授により 1943 年に初版が出版された。本書はその第 15 版の日本語訳本であり、坂井建雄先生の監訳のもと 4 名の卓越した解剖学者の翻訳により出版された。原著は当初より専門教育を受けた医学画家の手により精密に描かれており、その後、多くの関係者の手に引き継がれながら完成度を高めてきた。当初は木炭粉画で白黒調だったが、原画の高解像度スキャンによる再彩色により、魅力的な器官の輝きと組織の透明感が高まり、単なる彩色では達成できない深い可視化ができており、臨場感が一段と増している。

坂井先生が序で書かれているように、本書は「知識をもとに頭の中で組み立てられたもの」ではなく、一切の予備知識を捨てて、純粹にありのままの姿を描くことを基本としている。例えば外科医が初期に行う手術として単径ヘルニアの手術がある。多くの外科書では単径管と周囲臓器の関係が概念的に描かれているので、研修医には理解が容易でない。私自身も外科医になりたてのころは、実際の解剖学的単径管の構造が理解できなかった。本書では二次元図ではあるものの、深単径輪から浅単径輪までの道筋が周囲の筋肉や靱帯と共に俯瞰的に描かれており、極めて容易に理解できる。

本書はもともと学生に勉学してもらうことを目的に出版されたと想像する。しかし、外科手術の発達により外科医にはより高いレベルの解剖学的知識が必要となったために、本書は臨床家(外科医)にも役立つ解剖学書としての役割を増していったのであろう。CT や MR の画像を実際の水平断あるいは冠状断面標本と比較しながら学ぶことができ、表の作成も熟考されており、該当する図を一体的に配置

するなどの工夫が施されているために、臨床の先生方の理解は一層深まると思う。また、現場の臨床家にとって必要な解剖学的特徴については、青色で目立つように記載されており、臨床家にも役立てたいという担当者の強い意向がうかがえる。

近年の外科手術の発展は、より精緻な解剖学を必要とするようになっている。多くの領域で内視鏡下手術が導入されたことにより、肉眼では見えなかった画像、すなわち拡大された視野の下で手術が施行されるようになった。例えば私が専門とする直腸癌の手術では、これまで肉眼では特に気にしてこなかった骨盤腔底部の膜構造を認識することが重要となってきた。膜構造を意識することで、出血や神経損傷などを未然に防ぐとともに、より精緻な手術が行えるようになった。本書では骨盤内臓については表層筋膜と深筋膜などが周囲臓器との関連を含めて丁寧に描かれており、外科医が手術前に必要な解剖をあらためて確認し、気合を入れ直して手術に臨む点でも大切な役目を果たしてくれると確信する。

870 ページ余りの彩色豊かで情報豊富な本書が低価格に抑えられていることに驚く。学生にとっては高いかもしれないが、今後数十年にわたり使用できる秀逸の教科書であることを考えれば、本当に安価に設定していただいていると思う。本書の作成にかかわってこられたすべての皆様に心から敬意と感謝を表する。

● A4 変型・頁 896 2022 年 07 月

定価: 16,500 円

(本体 15,000 円 + 税 10%)

[ISBN978-4-260-04730-2] 医学書院刊